

■「ちくま評論入門」解説——読解問題への過程

6 ブレイディみかこ「THIS IS JAPAN」

●参考 ブレイディみかこ『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』【376/B1】
『子どもたちの階級闘争』【376/B1/1】（北野高校図書館）

■目標 エッセイ風の文章の深みを読む

■追跡

① **「わたし」が藤田さん**に会いたいと思ったのは、彼は現場で貧困支援をおこなっている草の根の活動家でありながら、地べたでの仕事を政治に繋げようとする「ミクロからマクロへ」の方向性を明らかに意識して活動しておられるように見えたからだ。英国では特に顕著だが、草の根の活動家のなかには政治に不信感を抱いている人も少なくなく、政治に期待しないから自分でオルタナティブな活動をやっているのだという、ある種ニヒリスティックなノンポリがけっこういる。だから藤田さんのようにストレートに政治に目を向けている草の根の活動家はレアだと思ったのだ。

エッセイ風の文章で、とりつきやすく見えるのに、内容には深いものがある、また、文章も練れている、そういう文章は、入試問題の素材として好まれる。

硬質の評論との違いは、評論が一般に、「問↓答」の構成を持ち、抽象的な議論と具体例（例となる事象、引用、データ等）がセットになって展開していくのに対し、随筆風の文章は、ある固有のできごとそのものを具体例として提示してくる点にある。ストーリーがあるわけだ。そのストーリーを示しつつ、考えを述べる。『枕草子』などでも、「こんなことがあったよ+感想」といった構成をとっていたね。

だから、読み始めの注意点は、小説の読み始めの要点と似る。ストーリーの展開する「時・場所・人」を明確に捉えること。プラス、そのできごとから汲み出された「思い」「意見」に注意する。小説と評論の中間なのだ。

さて、①段落で試してみよう。

人物Ⅱ「私」（書き手）、「藤田さん」（草の根活動家）

場Ⅱ貧困支援をおこなうNPO

時Ⅱたぶん現在

このあたりがチェックポイント。

一方、問い↓答え、の筋も捉えなくては。

問「わたしが藤田さんに会いたいと思ったのはなぜ？」

答「藤田さんのようにストレートに政治に目を向けている草の根の活動家はレアだと思っただから。」

もっと踏み込んでおこう。こう見てくると、①段落だけで、この文章のテーマは、「草の根の活動」と「政治」の関係、ではないか、と推測できる。藤田さんは、現場と政治をつなぐ立場、英国などの例は、現場と政治を切り離す立場。

② が、藤田さんによれば、日本の草の根の活動家が政治を意識しないのは、**「そういう英国内的意味での逆説的なノンポリとはちょっと違うという。」**

「そういう英国内的意味での逆説的なノンポリ」とは？

「政治に期待しないから自分でオルタナティブな活動をやっているのだという、ある種ニヒリスティックなノンポリ」。

オルタナティブⅡ代わりとなる、ノンポリⅡ政治運動に関心がない人。

「逆説的な」というのは、英国の活動家は政治をよく知っているが故に、逆に、それに期待することができないという認識を持っている、という意味だ。政治がやるべきところ、それが期待できないので、代わりに自分たちでやろう、というわけだ。

日本の活動家は違う？ どう違う？

③ 「日本のNPOはミクロの支援は丁寧にやりますけど、政治的な考え方が成熟していないし、議論もしていない。なぜこういう困った人たちが私たちの目の前に現れてくるのか、ということが分析できていないと思います。一三年間日本のNPO業界にいますけど、政治とか政策とかいうマクロな話をしたNPOの人なんてほとんどいません。」

日本のNPOの人は、そもそも政治のことをよく知らない、関心がない。「政治的な考え方が成熟せず、議論もしない困った人たち」。藤田さんは、このあり方に批判的だ。そして、**「政治的に習熟していない人がなぜ支援に入ってくるのか、という問いを持っている（英国では違うのに）」。**

④「では、NPOの方々は何のために活動しているんですか？」とわたしが聞くと藤田さんは答えた。

「人助けです。純粹に。だからいい人が多いです。本当にすごくいい人たちなんです。」

「そういう草の根の活動をやる人は、英国だとまず政治的理念があるというか、アクティヴィストがそういう活動を始めるように思うんですけど、そういう感じの人が日本のNPOにはあんまりいないんでしょうか？」

「NPOにもいないし、社会福祉に関わる人でもほとんどいないですねえ……。」

「それはちょっと、違和感ありますね。」

「養成課程に問題があるからだと思えます。アクティヴィストの養成というか、社会に働きかけていく人たちを増やさないと思うにもならない。」

と言う藤田さんは、自らを「ソーシャルワーカー」という肩書きで名乗っておられる。

が、藤田さんが考える意味での「ソーシャルワーク」はそもそも日本には存在しないとい
う。

政治的理念を持たない、たんなるいい人ばかりなのはなぜ？ ②で見た問いに対する、
藤田さん自身の応答は、「(活動家の)養成課程に問題があるから」。

ここには、藤田さんの意見も出ている。
「(たんなる人助けを超えて) 社会に働きかけていく人たちを増やさないとどうにもなら
ない」。

さて、次への問い。

「藤田さんが考える意味での「ソーシャルワーク」はそもそも日本には存在しない」とは
どういうことか？ これを頭に置いて読み進めよう。

⑤「ミクロとマクロの連動性って個人的には言い続けています。日本の場合はミクロの領
域だけに寄りすぎている。例えば福祉の現場やNPO支援で高齢者介護にあたる人々が、
目の前に苦しんでいる人を見たときに、日本だったら介護保険制度とか生活保護とかいっ
た制度に単純に結びつけてそこで終わってしまう。ある程度ニーズはそれで解決したでし
よ、と。解決したと思わせる支援になっている。

「ミクロ」の支援の問題点が、具体的に語られる。苦しんでいる人を介護保険制度、生
活保護といった制度に結びつけて終わり。ここで考えてほしい。制度に結びつけるのが、
なぜ「問題」なのか？ だってそのための救済制度じゃん。何が問題？という問題を頭に
置きつつさらに進む。

⑥でも、現実には介護保険制度や生活保護制度を利用して、厳しさを辛さはなくなら
ないんですね。そもそも、そうさせないために政策を動かしていかなければならないし、
人を支援する仕事をしている以上、ミクロとマクロの両方に働きかけるとするのは当然の
ことで、米国や英国のソーシャルワークの歴史を見ていくと、これはセオリーとして確立
されているんです。」

という藤田さんの話を聞きながら、ソーシャルワークではないが、保育士の資格をわた
しが英国で取ったときのことを思い出した。

今ある制度を利用しただけでは、辛さはなくならない。だから、政策(制度を決めると
きの議論)にも働きかけなければならない。

なるほど。現場を知り、現場で支援しながら、現場の苦しみを減らすために、社会(政
策・制度)にも働きかけていく存在こそが「ソーシャルワーカー」だといっている。

さて、以下は、書き手のブレイデイみかこさんのせりふ。

- 3/9 -

⑦「英国で保育士の資格を取ったときに、エッセイを書かされたんですけど。毎学期、テ
ーマは違うんですけど、『こういうときに保育士はこう対処しなければいけないが、その
行動の背後にある法的フレームワークについて述べよ。』とか、『その法律はどういう経緯
があつてできたのか。』とかそういうことを書かせられるので、わあ、保育士の資格でこ
んなことを勉強しなきゃいけないだと思つて驚きました。」

ブレイデイみかこさんは、保育士。ただし、英国の。

保育士だから、子供のことだけを見ていればよいのかというと、そうではない。現場の
行動の背後にある法社会制度に目を向けることを教育されている、英国では。

⑧ここで言うエッセイとは日本で言う随筆のようなものではなく、いわゆる短い論文の
ようなもので、質問がいくつかあり、定められた文字数のなかでその質問に答えながら論
じていくという形の文章だが、例えば一学期が「子供一人ひとりの発育を促すためのカリ
キュラムづくり」だったとすれば二学期は「特別支援教育」とか、エッセイのテーマはい
つも変わるのだが、法的な枠組みや関連法の歴史、その法ができた背景や学者たちの見解
など、かなり突っ込んだことを書かせられるので驚いたものだった。

英国で保育士になるには、今ある制度がどんな考えの下に、どのように成立してきたの
か、という視野を要求される。これは、法、制度が、初めから与えられていたものではな
く、現実からの要求によつて形作られてきたものであること、それを現場の人間こそ理解
しておかないといけないという考え方を示している。このあたり、さすが、西欧という感
じ。

⑨「で、最後に出てくる質問はいつも同じなんです。『では、これまで書いてきたことが、
inclusion (包摂) & diversity (多様性) の理念にどう関連しているのか述べよ。』ついで
うんです。もう毎回同じだから『何これ、またー?』って、だんだん書くことがなくなっ
ちゃって。inclusion & diversity 地獄と呼んでたんですけど。でも、ああいう考え方の訓練
がないと、どうしても日常の業務に埋没してしまつて、わたしがいまこれをやっているの
はどの法律があるからなんだろう、とか、その法律はどんな運動の結果としてできたんだ
ろう、とか、そういうことは考えなくなりますよね。それこそミクロの日常からマクロの
政治を見上げる習慣というか。」

とわたしが言うと、藤田さんが言った。

「わたし」の考えは、自分の今の支援の根拠はどの法律なのか、その法律はどんな運
動の結果としてできたのかを考える。日常から政治を見上げる習慣、が大事だというもの。
これは藤田さんの意見と一致している。

⑩「日本だと、ソーシャルワークの分野でさえ、ミクロの領域の実践しか大学教育でやってない。これはまあ日本特有なんですけど、社会福祉士っていう資格をつくったんですね。だからソーシャルワーカーがイコール社会福祉士のことです、っていう風にしちゃったから、みんな社会福祉士になろうとする。そうなる社会福祉士のカリキュラムが大事になるんですけど、実はあまりマクロなことが書かれていない。どうやって面接をするのか、とか、うまく相手の人とコミュニケーションを取るにはどうしたらいいのか、とか、そういうことばかりで。大学の教授も制度がうまくできていることを前提にして『こういう風になっていきます。』とだけ解説します。そのカリキュラムを根本的に変えない限りはアクティヴィストもソーシャルワーカーも増えません。NPOに入っていく人たちも、制度批判とか社会学についてもちゃんと学ばないと単にミクロのシーンで終わってしまいます。」

「制度がうまくできていることを前提にはならない」。これが藤田さんの考えだということがわかる。制度が前提としている現実が、目の前の実態と異なっていたら？ 実態に合わない制度になっていたとしたら？ そのときは、制度に、社会に、働きかけねばならない。そして、それができるための学びが必要だ。

⑪ 英国なら、保育士でもあんなことを書かされるぐらいだからソーシャルワークを学ぶ学生がどれだけマクロなことを学んでいるかは想像に難くない。それでなくともソーシャルワークを学んでいる大学生には社会運動に熱心な人が多いし、以前ブライトンで反緊縮デモがあったときも、中心になっていたのは福祉系の学科の大学生たちだったと記憶している。考えてみれば、緊縮財政で福祉をカットされたら一番苦しむ層の人々のことや、福祉の対象となる人々が増える時代は国がどのような政策を進めている時代なのかといったことを一番勉強しているのがソーシャルワークの学生たちだろうから、彼らが反緊縮で立ち上がるのは当然のことだろう。

英国のソーシャルワークの学生たちの政治意識は高い。「福祉の対象となる人々が増える時代は国がどのような政策を進めている時代なのか」といった問いも本質的だ。先進国の貧困は、その社会でふつうに生きていくためのコストがつけられられていくところに生じる。富の分配（＝政治）が偏ると、自分でコストを満たせない人々が福祉の対象となる。これは、本人の努力とか、社会福祉士の支援だけでは解決できない問題である。

⑫ が、これももし、ソーシャルワークの業務と政治がどう繋がっているかについて学んでいない学生たちだったらどうだろう。彼らは緊縮財政という定められた政策の枠組みのなかでの制度を使っているか、有効に人助けをするかということに傾注し、緊縮という政府が定めた政策には疑問を抱かないのではないか。

制度は変えられないから仕方がない。与えられた分に応じて、できることをやる。この

〈解〉は、あるとき有効だろうが、ソーシャルワークの業務については違う。この二人はそう考えている。

⑬ ミクロからマクロに向かわない考え方に慣れると、生活に根差した問題を政治に結びつける思考回路が失われてしまいうさだ。そうなる運動も地べたの切実な問題を訴えるのではなく、いきなり手元から遠いところの問題に向かっってしまう。

生活に根差した問題を政治に結びつけなかつたら、運動はその問題の方向に向かわなくなる。切実な問題があるのに、それは現行の制度では解決できない。だから、現場から逃避して「遠い問題」（現場から見ると遠い課題という意味か？）に向かっってしまう。

⑭ 「国民が一番に望んでいるのは、ちゃんと安心して暮らせる社会保障制度の実現で、第二位が経済、景気対策なんです。これは世論調査でもはっきりしています。だから安保とか、戦争法案を最優先に何とかしてほしいなんて意見は本当にリストの下のほうなんです。国民が最優先しているのは、要するに暮らしなんです。なのに、暮らしを何とかしてほしいという運動が日本にはなくて。だから安保法制も、あれは政府の迷惑なんです。そちらに意識を向かわせて抽象論を展開しておいて、暮らし自体を見せせないという思惑です。だからそちらに誘導させられてはいけません。憲法九条を守れ、戦争を起さずな、と言っていますけど、戦争をなくすのには一番有効なのは貧困をなくすことです。貧困、格差、差別、抑圧をなくすこと。戦争に行きたいと思う人たちは、自分は報われないと思う人たちですから。」

貧困をなくせば、戦争はなくなる、というのが真実なら、貧困が増えれば、戦争の可能性は高まる、ということになる。

身近な「暮らし」をなんとかしよう、という運動が、結局平和の維持にも繋がる、という論理。ここには、貧困、格差、差別、抑圧が、暴力を欲求するということが示されている。

⑮ 藤田さんは近年の日本の運動についてそう語った。ここで語られていることこそ、まさにミクロからマクロに向かうボトムアップ方式の戦争のなくし方だろう。

⑯ 下から上へ、というのは、単に下層（ワーキングクラス）から上層（エスタブリッシュメント）へ突き上げることだけではない。ミクロからマクロへ、手元の出来事から政治へ、【読解問題1】半徑五メートル内で起きていることを国会に持ち込めということだ。なぜなら、いまはマクロをやっている人たちにミクロが全然見えていない時代だから。

⑰ そして【読解問題2】そのことこそが「世界中で政治のクライシスが起きている。」と言われている現在の状況の元凶にもなっているのだ。

読解問題1と2を考えよう。

読解問題1 「半径五メートル内で起きていることを国会に持ち込めということだ」とはどのようなことか。

じつは、問いの含意がよくわからない。

★傍線部を延長すれば、「手元の出来事から政治へ」が得られるので、そのまま、

【解答例1】手元の出来事を政治へ結びつけよ、ということ。

という答案ができる。間違いではない。でも、なんか、短くね？

で、勝手に問いを変えてみよう。

読解問題1その2 「半径五メートル内で起きていることを国会に持ち込めということだ」とはどのようなことか。なぜそう主張するのも含め、本文全体の主旨をふまえて具体的に説明せよ。

【解答例2】 ソーシャルワークに携わる人間は、支援の現場で起きている問題を、今ある社会制度の枠組みの中だけで解決しようとするのではなく、どのように制度を変えればいか、実態に基づき、提案し、政治を動かす実践をおこなうべきだということ。

読解問題2 「そのこと」とはどのようなことか。

直接的には、「いまはマクロをやっている人たちにミクロが全然見えていない」ことを指す。「いまはマクロをやっている人たちに／ミクロが全然見えていない」と★切り身にして、言い換えていく。

マクロをやる、とは何か。①段落に「地べたでの仕事を政治に繋げようとする」「ミクロからマクロへ」の方向性」とあったように、マクロをやる、とは、政治をおこなうことだ。ミクロとは、地べたで（現場）の仕事のことである。

【解答例1】政治を行っている人たちが、現場の問題をまったく理解していないこと。

しかしこれも、最後の問いの答えとしては何か物足りない。

ミクロな（現場の）世界で実践する（いい人）は、マクロ（政治）に無関心。逆に、政治を実践する人はミクロの問題が見えていない。このような、分断が問題なのであった。

また、藤田さんのいっていた例では、「国民が一番に望んでいるのは、安心して暮らせること」。それなのに、政府は安保健法など、ミクロとかけ離れたマクロな課題を優先してくる。「そちら（マクロ）に意識を向かわせて抽象論を展開しておいて、暮らし自体（ミ

クロ）を見させないという思惑」ともいっていた。こういった「ずれ」を前面に出した答案も可能。

【解答例2】政治を行っている人たちが、国民が求めている日々の暮らしの問題解決に目を向けず、むしろ、暮らし自体から目をそらせるために安保健法など、暮らしからかけ離れた課題を優先していること。

読解問題3 貧困をはじめとする社会問題に立ち向かう日本の運動には、どのような問題点があるか、筆者の論旨に沿ってまとめよ。

筆者の論旨＝藤田さんの考え、と見ていい。「問題点」は、藤田さんの声を通して、⑩段落にまとまって出てくる。

- ・ ソーシャルワークの分野でさえ、ミクロの領域の実践しか大学教育でやってない。
- ・ 日本特有の社会福祉士＝ソーシャルワーカー。
- ・ だが、社会福祉士のカリキュラムにはマクロなことが書かれていない。
- ・ 大学の教授も制度がうまくできていることを前提にしている。
- ・ 対人的な技術しか学ばない。
- ・ 制度に対する批判・変革の精神が育たない。

これと逆の例が、⑪段落に出ていた英国のソーシャルワークの学生たちの例だ。

- ・ ソーシャルワークを学ぶ学生はマクロなことを学んでいる。
- ・ ソーシャルワークを学んでいる大学生には社会運動に熱心な人が多い。
- ・ 反緊縮デモの中心になっていたのは福祉系の学科の大学生たちだった。
- ・ 緊縮財政で福祉をカットされたら一番苦しむ層の人々のこと（政策とミクロの関係）
- ・ 福祉の対象となる人々が増える時代は国がどのような政策を進めている時代なのかといったこと（マクロな視点）
- ・ このような課題に対する認識と行動力を持っている。

問題点のまとめ方としては、「こういう問題があるので、こういうことができないという問題がある」というところだろう。

【解答例】 貧困などの社会問題に立ち向かう日本の運動は、困っている人を助けたいという善意から始まるが、例えばその中心となる社会福祉士の養成課程において、政治的・社会的な広い視野や問題意識を養う内容が欠けているなど、現場の問題を政治につなぐ意識や、自分たちが行動することによって制度を変えていくといった力に乏しいという問題がある。

(参考) ソーシャルワーク (Social work) とは、社会に対しては①社会変革 (social change)、②社会開発 (social development)、③社会的結束 (social cohesion) を、個人に対しては①エンパワメント (empowerment)、②解放 (liberation) を促進する実践を意味する。また、その実践を発動・継続する根拠 (原理) は①社会正義 (social justice)、②人権 (human right)、③集団的責任 (collective responsibility)、④多様性の尊重 (respect for diversities) であり、その対象は、①社会の様々な構造、②実践を必要とする人々である。(2014年7月のIFSWのグローバル定義から)

■読解問題

- 1 「半径五メートル内で起きていることを国会に持ち込めということだ」とはどのようなことか。
- 2 「そのこと」とはどのようなことか。
- 3 貧困をはじめとする社会問題に立ち向かう日本の運動には、どのような問題点があるか、筆者の論旨に沿ってまとめよ。

■発展問題

●日本のソーシャルワークの問題点が挙げられていたが、それでは、どうすればよいか。あなたの考えを書きなさい。なぜ、日本にその問題が生まれるのか、という点についてもふれなさい。

●重要語「制度」この文章で使われている制度は、法律で決められている制度のことだが、評論でよく使われるのは、さらに広義の「社会的文化的に決められている仕組みや決まり」の意味での制度だ。暗黙の内に、知らないうちに従ってしまっているしくみのことだ。